

第2回土生町史跡探訪講座

宮島さんより八坂寺まで



平成23年12月1日
土生公民館

第2回土生町史跡探訪講座

土生公民館

H23.12.1

この講座の資料は、森本 繁著 浪速社 瀬戸内しまなみ海道「歴史と文学の旅」・因島文化財協会の「因島史跡散歩」「土生村風土記」を参照させていただきました。ありがとうございました。

1. 宮島（さん）神社について：塩南区

現在のお宮は、元日立会館建設後道路拡張のため、移転されたもので、元の場所は、野方接骨院の所にありました。元日立会館跡も、以前は入り海でした。

土生町大山神社の秋祭りには、お旅所（たびしょ）になっています。宮島さんとは元々は巖島神社であって、海の神であり、祭神は宗像三女神であります。即ち、奥津島比売命（おきつしまひめのみこと）市杵島比売命（いちきしまひめのもこと）多岐津比売命（たぎつひめのみこと）であり、安芸の宮島も同じ神を祭っているそうです。

現在奥津島比売命は、澳津宮、市杵島比売命は中津宮に、また多岐津比売命は辺津宮に祀られ、三宮を称して宗像神社と言っています。



宮島さんの境内の入り口にあって、宮島さんの謂われ等が刻まれています。

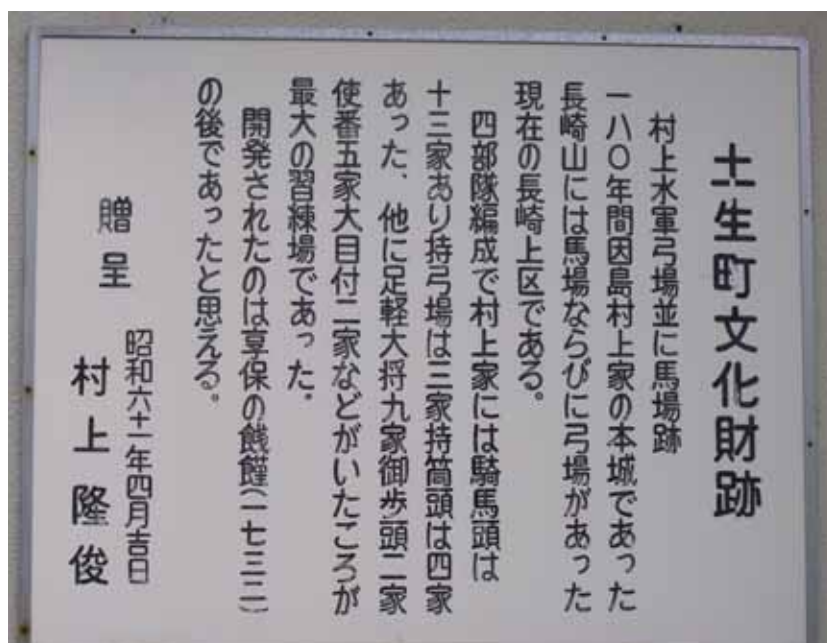
宗像三神を祀る主な神社には

江ノ島神社	神奈川県藤沢市
巖島神社	広島県 宮島町
宗像神社	福岡県 玄海町
田島神社	佐賀県 呼子町

宮島さんの境内の道側石碑があって、その表側には次の神名がある。大国主命・天在諸神・少彦名命・金刀平神・天照大神・猿田彦神・甘志道敷金彦命・等が刻まれている。

2. 村上水軍の弓並びに馬場跡

この地に南北朝時代当時長崎山城の弓・馬場の練習場がこの辺にあったそうです。この辺はおそらく、海岸線だと思われませんが、この標識の側の中に、それらしきものが70年前に見たと言われていますが、今は溝の中に岩がわずかに見えます。



溝の中に岩があり、弓場の跡だそうです。

弓場医院の山側に遺跡の表示説明があります。

南北朝時代とは 一般的には鎌倉時代の後で、元弘の変や建武の新政も南北朝時代の事件として含まれる。正確には、1336年(延元元年/建武3年)に足利尊氏による光明天皇の踐祚、後醍醐天皇の吉野転居により天皇王朝が分裂してから、1392年(元中9年/明德3年)に両王朝が合一するまでの時代を指し、室町時代の初期に当たる。この時代の天皇王朝には、南朝(大和国吉野行宮)と北朝(山城国平安京)に2つの王朝が存在し、それぞれ正統性を主張した。南朝を正統とする論者は「吉野朝時代」と称する(南北朝正閏論)。
「ウィキペディア (Wikipedia): フリー百科事典」より

村上水軍(むらかみすいぐん)は、日本中世の瀬戸内海^[1]で活動した水軍(海賊衆)である。その勢力拠点は芸予諸島を中心とした海域であり、後に大まかに能島村上家、来島村上家、因島村上家の三家へ分かれた。彼らの多くは真言宗徒であり、京都などに数多く菩提寺が残されている。また、今も瀬戸内周辺地域には村上水軍の末裔が多く住む。主な活動は航行船の破壊、略奪、信書の開封破棄等を通じた同盟関係の分断である。20世紀まで瀬戸内海で見られた漂海民も、村上水軍の末裔ではないかといわれている^[2]。代表的な表紋は「丸に上文字」や「折敷に縮み三文字」など。「ウィキペディア (Wikipedia): フリー百科事典」より

3. 塩田新設の記念の木について

荒神区と塩浜地区に塩田を作られた時に植えられた記念の木で、荒神区の元千歳湯の少し上と、浜岡の酒造所の中にあったそうです。

また、相方印刷所の前の道が塩田の土手であったと言われていて、相方印刷所側が塩田であり、向かいの家が土手上であったそうです。



4. 願いのお地藏様

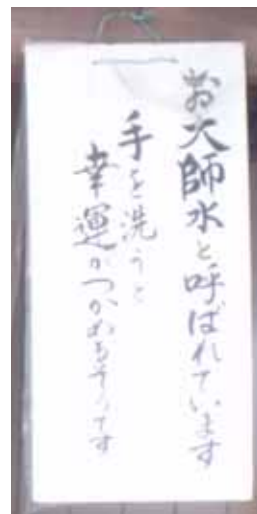
土生町平木区にある島四国八十八ヶ所の四十六番札所浄瑠璃寺の堂内に、座布団に座っているお地藏様があります。島四国の札所の中で近代版と言いますか、願いをかけて、その願いが叶うかどうかを、即お返事戴ける、まるで宝くじの速報版の様なお地藏さんだそうです。まず願掛けをした後、もう一度この願掛けが叶うかどうかお願いをして、このお地藏さんを持ち上げると、軽く上がれば願いが叶い、重くて上がりにくい時は願いが叶えにくいと言われてるので、お願いを立て、即座に願いが叶うかどうかを即回答くださると言うので、お詣りがあるそうです。

この札所から山手へ100㍍程行くと奥の院という祠があるそうですが(確認出来ていません),ここは一畑のお薬師さんと言われ、眼の仏様で、眼の悪い方が多くお詣りされる所で、生眼八幡菩薩であるとも言われているそうです。

島四国内にはここの他に、三庄町善徳寺境内の三十三番札所がある前に「願いのお地藏さま」があり、ここと同じようなお願いをされると言われている珍しいお地藏さまもあると言われています。



願いのお地藏さん



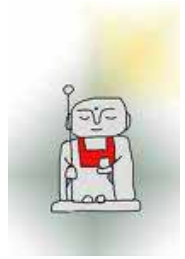
高野山の杖の水
高野山の杖の水という井戸が、願いのお地藏さんの下に入り口にありす。

5. 芋地蔵について

香川花輪店裏の空間に、芋大師として祀られていたそうです。家の増築で移転され、現在三庄町の善徳寺の境内から墓地に上がる右側に祀られています。



善徳寺の中に祀られています。



「芋(いも)地蔵」とは、江戸時代に甘藷(かんしょ)(薩摩芋)を瀬戸内海の島々に伝えた功労者の下見吉十郎をまつた石づくりの地蔵菩薩像のことです。

現在、上浦町瀬戸の向雲寺境内にあり、地蔵の台石の左面には「下見吉十郎」の文字が刻まれています。

吉十郎は、延宝四年(一六七六年)、大三島の瀬戸村に生まれました。吉十郎の先祖は河野氏といわれ、妻と二男二女の四人の子どもがいました。しかし不幸なことに吉十郎の子は、全員が幼くして亡くなってしまいます。なげき悲しんだ吉十郎は、正徳元年(一七一一年)、六十六部廻国行者(ろくじゅうろくぶかいこくぎょうじゃ)となって諸国をめぐる旅に出る決心をします。吉十郎、三十五歳のときでした。六十六部廻国行者とは、書き写した法華経(ほけきょう)を全国六六ヶ国の寺院などの霊場に、一部ずつ納めて回る巡礼者のことです。

瀬戸村から旅立った吉十郎は、広島尾道を経て京都、大阪と回り、九州に南下しました。同年の十一月二十二日に、薩摩国(現在の鹿児島県)日置郡伊集院村(ひおきぐんいじゅういんむら)をおとすれ、そこで、土兵衛という農民の家に泊めてもらいました。

このとき、吉十郎は農民の家で、薩摩地方で栽培されている甘藷をごちそうになります。そして、薩摩ではこの芋のことを琉球(現在の沖縄県)方面から伝わったとして「琉球芋」と呼んでおり、栽培方法が簡単で主食にもなるものだとして教えてもらいました。しかもこの作物は、やせた土地でも育つので、飢きんになっても耐えることができるということです。吉十郎は、甘藷の話の聞けば聞くほど、「何としても故郷へ持ち帰らなければ」という思いを強くしました。なぜなら吉十郎の故郷である瀬戸内海の島々は、平地が少なく、一たび水不足や洪水があると作物が収穫できずに、いつも農民が苦しい思いをしていたからです。食糧不足で悩む瀬戸内海の島々でこの甘藷を栽培することができれば、飢えに苦しむことがなくなるかもしれません。吉十郎は土兵衛に「ぜひこの甘藷の種芋を分けてほしい」と願い出ました。ところが、薩摩藩では甘藷を藩の外へ持ち出すことを固く禁止していました。もし見つければ、重い刑罰を受けなければならなかったのです。

その後、吉十郎は八十歳で亡くなり、瀬戸村の向雲寺にほうむられました。そして彼の亡くなった後、彼の業績を記憶にとどめておこうとこの寺に「芋地蔵」がつくられたのです。

上浦町では今でも毎年、下見吉十郎の命日として、旧暦の九月一日に「芋地蔵祭り」が行われています。土兵衛には断られましたが、吉十郎は自分の命の危険を覚悟で、密かに種芋を故郷に持ち帰る決心をします。そして苦難の末、種芋をたずさえて何とか無事故郷に帰ることができました。吉十郎は翌年の春を待って種芋を植え、試しに苗をつくってみました。収穫できるかどうか、村人たちも半信半疑でしたが、やがて秋になるとたくさんの甘藷がとれ、たいへん

喜ばれました。こうして瀬戸村から始まった甘藷栽培は、瀬戸内海の島々に次々と広がっていき、農民たちは甘藷によってさまざまな災害を切り抜けることができるようになりました。

享保十七年(一七三二年)に西日本で起こった大飢きんにより、松山藩では多くの人が飢えで亡くなったと伝えられていますが、この地方では、飢えで亡くなる人はほとんどいませんでした。吉十郎の持ち帰った甘藷が多くの人の命を救ったのです。

後に、青木昆陽が江戸の小石川薬園で甘藷を栽培し、幕府は飢きんの対策として全国に甘藷の栽培を奨励しました。薩摩で「琉球芋」と呼ばれていた甘藷は、こうして全国に広まり「薩摩芋」と呼ばれるようになって、人々を飢きんから救いました。

【出典、参考文献】「愛媛子どものための伝記 第四巻」愛媛県教育会 / 「第一回上浦いも祭り(平成十四年)資料」

6 .

土生町文化財だより第14号の資料より抜粋。

昔と言っても、明治の中頃のことだと言うことですが、土生村は江戸時代から明治の初め頃までは、郷や本土生が中心で、ここの赤松峠から東の長崎方面は人口が少なく、峠道を通る人もめったにいなかったそうです。でも、土生村唯一の主要道路であり、海岸道路が出来たのは大正の初め頃の事だそうです。この道は東も西も険しい坂道で人がやっと通れる程の山道でした。

長崎に造船所が出来るようになり、人口もだんだん増えてきましたが、夜ともなれば、昔からこの峠には良く狸が出るとのことで、この一帯は人家もなく、所用があってこの道を通る人は、狸にだまされて皆困っていたそうです。そこで、付近の方が相談して、3尺(約一丈)程ある狸のお地蔵さんを造り、一本松の東側の狸が出てきても、この狸のお地蔵さんに恐れたのか、人をだまさぬようになったと言うことだそうです。また、終戦後10年後(昭和30年)頃の改修工事のときまでは、道ばたに立っていて人々を助けていた狸のお地蔵さんがあったそうです。土生村でも昭和の初め頃までは、深い谷や山などにはまだかなりの狸がいたようです。

この峠の一本松は、東から来ても西から来ても、格好の休み場で、峠を通人は皆一休みをする場所でありました。

その後、土生村も造船景気で町に発展し、長崎が土生の中心となり、交通量も増え、海岸に道路が出来、又、赤松峠も車が通れるように道路幅も広げて改修されました。又、赤松峠の一本松は、通行者の良い休み場所でありましたが、昭和の初め頃に不幸なことがあり、この松のことを余りよく言われなかったことがありました。その後、付近一帯も次第に開発が進みとうとう、500年余りも生き続けた土生町の名物「一本松」もついに切られ姿を消しました。

現在この付近は、人家もたくさん建ち保育所もあり、平木家の記念碑や金之神等がおまつりされています。

この峠から東に行くと、塩北から本通り商店街に行き、西に行くと小学校を経て公民館へ行きます。





7. 播磨石の磨崖仏

(1) この大岩は高さ4尺，周囲25尺余りの大岩に，岩の左の方に寄進者の名前と思われますが，大正6年3月に四十七番札所八坂寺の方か，宇和部村の「高本佐一郎（さん）」という方が，この岩を寄進されたか，また，交渉くださったのか，いずれにしても，お世話頂いた方の名前が刻まれています。



(2) 正面に弘法大師の磨崖仏，大正6年3月，寄進者「村井才吉（さん）」と刻まれています。

(3) 右隣りに石鎚神社の磨崖仏，寄進者は「村井才吉（さん）」で，最上段左に月さま，右に日さま，下の中央に役行者（えんのぎょうじゃ），又は，役小角（えんのおずぬ）最下部左に猿田彦命，右に山伏，何れにしても，密教室系の山伏が修行するところの神社だと思われます。



(4) 右隣りに金之大神と，正一位秋葉神社の磨崖仏があります。秋葉山大権現と呼び火防鎮護の神として，知られています。

(5) この大岩の裏側に因島竜神として昭和63年5月吉日建立として，神社が建てられています。寄進者は，因島市，「徳田己沙（さん）」と記されています。大体，竜神とは，水神の信仰及び，その表象たる蛇の信仰を基底に，中国から渡米した竜宮，竜神信仰が習合した多様な習俗に現出する神。タツマキの時に竜神が昇天するといわれるのは，中国から渡来後の変遷だと思われます。同様に水神から分化したものに海神があり，竜神も同意語として用いられています。海神のいる海底の宮は「わだつみのくに」と古典に記され，南島では「ニライ」などと呼ばれ，人間界と行き来出来ると考えられているそうです。



保育所の上の山の方にあります。



磨崖仏(まがいぶつ)は、そそり立つ岩壁や岩壁を龕状に彫った内側に刻まれるなど、自然の岩壁や露岩、あるいは転石に造立された**仏像**を指す。切り出された石を素材に造立された石仏(独立石仏)は移動することが可能であるが、磨崖仏は自然の岩壁などに造立されているため移動することができない。「ウィキペディア (Wikipedia): フリー百科事典」より

8. 土生小学校記念碑について

昔，赤松峠の一本松から小学校に降りて行くと，今は右に回って宇和部山手に行けませんが，一本松の道路拡張までは今のプール辺りから山手は竹藪であって，宇和部の山手の方へ行くのには，一端降りて小学校の中から北側からでないといと，山手には行けませんでした。

記念の碑は「由興」となっているが，これは（由緒を興す）との意味であって次のように，記されています。

土生尋常小学校について，明治6年3月1日土生対潮院に創立土生小学校と呼ばれました。明治7年9月字中畝に移転，2教室藁葺（わらぶき）の1軒屋と伝えられています。

明治14年9月字神原に移転，2教室瓦葺き（かわらぶき）で山神社下。この年より義務教育制3年となります。明治21年4月土生尋常小学校と改称されました。明治40年3月字宇和部現在地へ移転6教室新築。この年10月土生小学校再建記念碑「由興」建立現在に至ります。大正3年12月校舍増築，65坪小使室と宿直室増築されました。



尋常小学校とは [1886年](#) (明治19年)の[小学校令](#)で尋常小学校と[高等小学校](#)が設置される。このときの尋常小学校 ([義務教育](#))の修業年数は3年間もしくは4年間で，[1900年](#) (明治33年)の改正で4年間のみに統一され，その後，何回かの変遷を経て，[澤柳政太郎](#)文部次官の下，[1907年](#) (明治40年)に6年間に延長された。[1941年](#) (昭和16年)の[国民学校令](#)により，[国民学校](#)が設置され，尋常小学校と高等小学校は消滅した。[第二次世界大戦](#)終戦後，[1947年](#)に消滅前の尋常小学校を母体に[小学校](#)の名称が復活，消滅前の高等小学校は [1947年](#)に新制[中学校](#)に改組された。「ウィキペディア (Wikipedia): フリー百科事典」より

9. 島四国第47番札所八坂寺

ご本尊は阿弥陀如来であり，お堂の右隣には大岩に磨崖仏が掘られています。石仏も11体程有り，大岩の上側に割合大きな石仏があつて大正10年6月「巻幡徳之助（さん）」と記されています。中央に阿弥陀如来で，向かって右に観音菩薩，左に勢至菩薩が脇侍（わきじ）になっています。寺には寺号と併に山号というのがあります。昔から山に寺を建てたからだと思われませんが，八坂寺は山号も熊野山となっているが，熊野とは古来死霊のこもる山中としての代名詞であります。51番の石手寺や43番明石寺も同じ山号の熊野山だそうです。



毎月21の日に地域の人がお世話をされています。

因島八十八ヶ所の謂われ

むかし、尾道に住む漁師が四国へ漁に出たの帰りに一人の旅僧から「どこでもよいから舟の着いたところへおろしてもらえないかね」と便乗をたのまれたので心よく舟に乗せ、途中なにごともなく、大浜の現在灯台のある浜辺へ降ろしました。

旅僧は厚く礼を言って上陸しました。漁師は見るともなしに振り返ると、たった一人乗せたはずの旅僧がみるみるうちに増えて八十八人の僧が次々と上陸して行きました。この話は人から人へ伝えられ弘法大師が因島へ渡られたのだといううわさがひろまったのでした。その後も奇跡的なことがたびたびあったので明治四十五年因島の全村が話し合い島四国として、因島八十八ヶ所の霊地を設けることになり全島民の奉仕でつくられました。

この巡拝路程は84km(約21里)で3日間のハイキングコースに絶好、旧3月21日を中心に付近の島じまや、遠く北海道方面からも大師のご遺徳をしのび村上水軍の遺跡や美しい島のまわりの景色をたずねつつ、島人の厚い情にひたる参拝客も多い。(各お堂は無人で朱印もありません。)

平成20年、(社)因島観光協会発行の「へんろ」と題するリーフレットより

宮島さんから→土生小学校→八坂寺

